

教育実習を通して、生徒一人一人に対してどのような支援が適切かを考え、担当の先生と調整ながら実践することで、とても楽しく学ぶことができた。チャレンジタイムや授業、休み時間、給食など、場面によって生徒の表情や言動に違いがあり、大学の授業で学んできた理論や方法を生かしながら、生徒それぞれの特徴を考慮して支援を常に考え続けることが重要だと学ぶことができた。

T1として行った公開授業では、教科としての学習のねらいや学習内容を定めることが重要であると学んだ。単元の目標や本時の目標を明確に定めることで、授業中の生徒への発問や生徒の発言に対するコメントで、生徒が目標に立ち返る事ができる言葉掛けを行うことができた。

3週間という期間であったが、生徒たちと関わる中で、分からないことを質問しにきたり、世間話をしにきたりしてくれるようになり、信頼関係ができていと実感することができ、楽しい教育実習となった。

私は、教育実習を通して、児童が主体的に取り組める環境づくりや支援の大切さに気付いた。T1として授業を受け持った当初は、教師が準備した活動に児童がちゃんと取り組んでほしい、めあてを達成してほしいという意識があり、活動を誘導的に進めたり説明が長くなってしまったりしていた。しかし、先生方との事後研修や他の授業でT2として参加することを通して、それでは児童の自発的な「できた。分かった」という実感を生み出すことにつながらず、児童の自発的な気付きや学びこそが児童の成長につながっていることに気が付いた。この学びを経て、授業では端的な指示や児童の発言の場を増やす、発言を待つことを意識するようになり、また、授業外でも、児童に対し、できていないこと全てを支援するのではなく、児童が自分でできることや、その状況で何をすべきかに自分で気が付けるよう、実態に合わせて児童自身が主体的に成長できる支援を行うことが重要だと学んだ。

今回の教育実習を通して、子供たちとどのように関わっていくことが必要なのを感じることができた。全体に対して指示を出すタイミングや、どのようにしたら児童が教師や教材に注目をしてくれるのかを意識しながら言葉掛けを行うことができたり、個別に支援が必要な児童に対しても、ただ言葉だけで伝えてもなかなか注意を引くことができない時には、モデルを示したり行動のはじめを支援したりすることによって、自分でできることは、できるだけ自分でできるよう促すための支援の方法を学ぶことができた。

TTのあり方についても学ぶことができた。公開授業では、T1としてクラスの全体を見ながら授業を円滑に進めるために、T2やT3の先生と協力して、できるだけ児童が授業に参加することができるようにしたり、授業で児童にとって待ち時間をできるだけ減らして、たくさん活動に参加することができるようにしたりすることを、授業づくりの中で意識しながら実習を行うことができた。様々な教材を作る経験ができたので、今回学んだことを生かして、今後の授業づくりにも生かしていきたい。

今回の教育実習で、ティームティーチングにおけるT1とT2のそれぞれの役割について学ぶことができた。具体的には、公開授業や実地授業でT1とT2のそれぞれを行い、T1には授業を進める役割があり、T2には状況を見ながらT1のサポートをする役割があるということ、身をもって知ることができた。現場の学校で実習をさせてもらえたからこそ、学ぶことができたと思うとともに、実際に児童生徒の実態把握を行いながら授業をつくっていくという貴重な経験をする事ができたと感じている。実習中に考えることはたくさんあったが、子供たちとたくさん関わっていく中で、楽しい実習になった。

特別支援学校中学部では、中学生らしい振る舞いが意識されていました。将来のことを考え、年齢に適した対応を取ることを教えていただきました。また、タイミングや状況などを鑑みて、子供がなぜそのような行動をしたのか、それに対してどのような対応を取ることが適切かということを考えることが重要であると学びました。さらに、直接的な指示だけでなく、友達同士で声を掛け合えるようにしたり、自分から動き出すまで待ってみたりする等、子供に気付きを促すことも教えていただきました。

本校で教育実習をさせていただき、非常に多くの学びを得ることができました。作業学習に参加し、生徒がこれから生活をしていく上で、自分の役割に責任をもって、仕事を積極的に行っていくことができるようにするためのサポートを行いました。生徒一人ひとり行うことが異なっていたとしても、自分のできることを集中して行っていくことができるように、生徒自身が立てた目標を意識しながら、活動することを促す言葉掛け等を行いました。生徒の将来に関わる活動の一助として携わることができ、非常に貴重な体験をすることができました。

この実習を通して、多くを学び自分自身が成長できたと感じている。実際に生徒を前にして行った授業では、その場で生徒の反応が返ってくるので、大学の模擬授業では味わえない新鮮さがあり、生徒が積極的に取り組む姿や楽しむ様子を見ることで、指導案づくりや教材の製作は大変な作業だったが、その努力が報われる瞬間を体験できるなど、貴重な時間であった。また、言葉掛け一つで得られる生徒の言動が変わることを学び、特別支援学校でより重要とされているであろう、子供一人ひとりの個性に寄り添い、将来の自立を見据えた支援がいかに重要であるかを理解することができた。

この経験を生かし、子供たちがより豊かに成長できるような関わり方や支援について、今後、大学やその他の実習を通して考え、学びを深めていきたいと考えている。

教育実習を通して、子供たちが主体的に考えて、行動することができるような支援が必要だと学んだ。実習の始めの方は、授業で子供たちが次にやるべきことを分かっていないときに教えたり、活動に遅れているときに手伝ったりしていた。だが、先生方の子供たちへの支援の様子から、子供たち自身が授業の中で考えて行動することができるような支援が必要だと気が付いた。実習を通して、児童と距離が縮まり、先生として頼ってくれることが嬉しかった。